

## ■日本男児遠征双六の解説

本双六は、大正15年（1926）、大日本雄弁会の少年倶楽部新年号の付録である。

案は少年倶楽部編集局、画は松野奏風（※1）である。

欄外に記載されている「遊び方」は以下の通りである。

- ・赤軍と青軍に分かれ、それぞれの振出しから矢の方向に進む。
- ・相手の色の線に移る矢印あれば、その方向に進む。
- ・自分の色の線を通る限りは、矢印進む・進まないは自由。
- ・損得を考えて進める。
- ・味方の要塞で止ったら出目の2倍進む。敵の要塞では1回休み。

振出しは、赤軍も、青軍も要塞の風景である。ここから、双六が展開される。

途中には、以下のマスが用意されている。

水雷、潜水艦、順風、猛獣、間道、巨象、自動車、悪路、故障、大河、濃霧、暗礁、  
燈台、機関銃、突撃、飛行機、飛行船、悪気流、快速、塹壕、毒ガス、小銃戦、夜襲、  
奇襲、幕営、強雨、そして、上がりは、陸軍と海軍の少年将校。その背景では両軍の兵士が  
万歳を叫んでいる。

なお、小さなマスに、毒ガスの記載があることに注目したい。毒ガスは、国際条約で使用が禁じられていた。しかし、第2次世界大戦で日本軍は毒ガス兵器を大量に製造し、おもに中国での侵略戦争で使われたという。敗戦時に70万発といわれる毒ガス弾が各地に廃棄され、今も人々に脅威を与えている。環境省のHP「毒ガス弾等とは何か ～旧日本軍製造の毒ガス兵器～」の中で、「毒ガス弾と思われる物を見つけたときは、絶対に手に触れず、すぐに警察署や消防署に通報してください」と、注意を呼びかけている（表①参照）。

本双六では、陸・海・空のそれぞれの兵器や戦術が描かれている。軍国教育の一環として、子供の国威発揚・戦意高揚のために、双六の持つ広報宣伝機能が利用されてしまったことは残念というほかない。

裏面は奇抜滑稽「乗物競争突破双六」である。

※1 松野奏風（まつのそうふう）：能画家。明治32年東京生。尾竹国観、月岡耕漁に師事し、兵役後は能画に専念する。昭和38年（1963）歿、64才。四街道市に「奏風・秀世記念 松野文藝館」がある。